

Title	『新可笑記』巻一の二「ひとつの巻物両家に有」考 : 松永久秀の人物造形をめぐって
Author(s)	仲, 沙織
Citation	語文. 2022, 116-117, p. 3-13
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/90785">https://hdl.handle.net/11094/90785</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 『新可笑記』 卷一の二「ひとつの巻物両家に有」考

——松永久秀の人物造形をめぐる——

仲 沙 織

はじめに

『新可笑記』（元禄元年（一六八八）十一月刊）中の一章、卷一の二「ひとつの巻物両家に有」の内容は次の通りである。

和州信貴の城主松永霜台（以下、久秀と表記する）は筋目の正しい浪人を召し抱えようとした。やってきた浪人の中に楠木正成の末裔を名乗る者が二人居り、それぞれ正成の太刀と詠草を持参してきた。老中達は詮議し鑑定を行ったところ、片方は詠草が本物で太刀が偽物、もう片方は太刀が本物で詠草が偽物であると判明した。家老は兩人に落度はないと判断し、松永久秀は「その器量によって小知で堪忍するならば、二人とも召し抱えよ」と命令した。家老が大横目の三人へと密かに「大殿は御憐憫の心から二人とも召し抱えたが、彼らは義理を立てて死んでしまうだろう。何とか長く奉公させたいと思うので、太刀と詠草の噂を収めるように心がけよ」と言

うが、大横目達には理解できなかった。十日程後、その浪人がもう一人の元に死装束で訪れる。太刀と詠草の件を知ってしまい、二人とも一分が立たないと告げ、二人は遺書を残し、刺し違えて果てた。二人の苦悩が書かれた遺書を読んだ松永久秀をはじめ家中の人々は感じ入り、二人を惜しんだ。

その後、家老は二人の浪人が楠木正成の末裔ではないと推測した。この事件を知った金剛山の麓にある水分の地侍の何某が、代々の家系図と武道具の目録を持参し、その二つの道具は自分の親が修復に出した時に盗まれたものであると証言し、それらを頂きたいと願った。松永霜台はそれらを彼に与えた。

卷一の二では、楠木正成と松永久秀という歴史上の人物の名が挙げられる。活躍した時代が異なる二人であるが、信貴山寺の申し子とされた楠木正成と「和州信貴の城主」であった松永久秀と

は共通の地名で結び付いているという指摘が既になされている。<sup>②</sup>  
この両者の存在と巻一の二の展開との関係について、平林香織氏は次のように論じている。

そういった伝説の楠木正成像を援用して表現される町人たちの逞しい姿と比べると、本話における楠木正成伝来の品物にすがって生きる道を見つめようとして逆にそのことで死に追いやられた二人の浪人のあり方は、不運に争えない脆弱なものだった。(中略)

本話にあるのは『太平記』的な後醍醐天皇のために命を賭して闇雲に戦った英雄としての楠木正成のイメージとも別のものがある。行間から立ち現われてくるのは、楠木正成の刀と詠草という根拠のないものを判断基準として次々と人々の判断が裏目に出てしまう危うさとそのような危うさの上に生きている武士の姿である。それが、「国を治めて風枝に音なき」城下のこととして描かれる。「国主にありたきは良き家老ぞかし」という賞賛の結語は、その良き家老が実際は殿の判断の間違いを指摘し、かつ二人の無駄死にを防げなかった、という藩政の綻びを逆照射する。城主松永久秀が織田信長との紆余曲折を経て信長に反抗して名物平蜘蛛茶釜とともに爆死したという史実に思いを馳せるならば、国主の英断や家老の卓見として記述されるできごと一つ一つが陰翳を帯びたもの<sup>③</sup>に思えてくる。

平林氏は楠木正成と巻一の二に登場する浪人達とが対比的な存

在であり、さらに城主松永久秀の辿った末路を讀者に想起させることで、作中で称賛される武士の行動が「陰影を帯びた」負のイメージを喚起させるものとなると指摘する。つまり、楠木正成と松永久秀のイメージと作中の登場人物の言動とが参照・比較される関係にあると捉えられている。

また、羽生紀子氏は巻一の二の構成を三つに分割し、それぞれに『太平記』が利用されていると指摘する。<sup>④</sup>さらに、後南朝の楠木正秀らによる禁闕の変、楠木正虎による楠木氏の朝敵赦免の勅許の逸話と松永久秀との関係について次のように述べている。

楠木正虎の系図上の父は、禁闕の変を起こした楠木正秀の子という河内大饗氏の大饗正盛と言われる。正虎は正盛の養子に入って楠長譜と名乗り、松永・織田・豊臣家の右筆を務め、永祿二年(一五六九)に楠木正成の子孫と称し正成の朝敵としての赦免を嘆願した。松永久秀の取り成しで正親町天皇の勅免を受け、正式に楠木正虎と改名したという。書は世尊寺流の一流の書家であった。松永久秀の取り成しのところは、織田信長、あるいは織田信孝と松永久秀とする異伝もある。(中略) 書置きを「筆跡」とし、「筆跡を感じ」と繰り返して「筆跡」が強調されるのは、楠木正虎による楠木氏の朝敵赦免の勅許を願う逸話を想起させるものである。正虎が世尊寺流の一流の書家であったことを嵌め込んでいるのである。<sup>①</sup>

(※仲注、「浪人二人が太刀と詠草を差し上げ、真偽の判定が問題となるところ」)にことさらに松永霜台の名があげられ

るのは、正虎との関わりを想起させるものである。<sup>5)</sup>

(以下、引用の傍線は稿者による)

このように、羽生氏は楠木氏の事跡と松永久秀との関係性が巻一の二の展開に大きな影響を与えたとしている。

先行研究において、楠木正成と松永久秀の存在を通して巻一の二は読み解かれてきた。だが、『新可笑記』では、明確な人名が挙げられること自体が珍しい例である点には留意せねばならない。

『新可笑記』中に言及される人名は全二十六章段中、巻一の一の「胡蝶」「菊若」「橘の正連」、巻一の二「楠正成」「松永霜台」、巻一の五の「浅井の何某」、巻二の二の「武烈王」、巻四の二の「伊勢」「小町」「信玄公」、巻五の二の「赤松の家」、巻五の三の「松井の何某」「遠山氏の何某」「田川氏の何某」、巻五の四の「後奈良院大永二年の春」、巻五の五の「団八」である(傍線部は歴史上の人物)。同じ西鶴の武家物『武道伝来記』『武家義理物語』と比べて、人物に名前が設定されていない、もしくは「何某」のようにぼかされている例が目立つ。巻一の五の「浅井」や巻五の二の「赤松」のように歴史上の人物が推定される例もあるが、実際に作中で歴史上の人物が登場する例としては巻一の二、巻二の二、巻四の二のみである。

前述した先行研究や、二人の浪人が自害する場面が『太平記』(※仲注、巻第十六「正成兄弟討死事」、巻第二十六「楠正行最期事」)の楠木正成・正季兄弟及び正成の長男正行兄弟が同じく差し違えて自害することを踏まえる」という広嶋進氏の指摘のよう

に、巻一の二は楠木正成をはじめとする楠木氏の事跡が主に検証の対象とされてきた。しかし、実際に城主として作中に登場し、物語に大きく関わる松永久秀の言動についてはさらなる考察の余地があると思われる。松永久秀の登場は、楠木正成の「信貴」という地名からの連想や、忠臣として名高い楠木正成と正反対の逆臣のイメージを持つ人物を対置させるという理由に過ぎないのか。本稿では『新可笑記』刊行当時の松永久秀に関する言及や評価を分析し、巻一の二における松永久秀の言動を検証することで、新たな視点での読みを提示したい。

#### 一 松永久秀の評価

まずは、松永久秀の経歴について『將軍記』『織田信長記』第十(寛文四年(一六六四)刊)を挙げる。

十一月十日、信長上洛有て、河内国にはつかうし、三好左京大夫義次をせめらる。十六日に義次自害して城おちいる。(中略)長慶が嫡子筑前守義興(又号/義長)、父に代て権柄をとる事四年、家老松永弾正忠久秀がために毒害せらる。今、三好左京大夫義次は義興が弟なり。ある説には十河一存が子也。義興死して久秀また義次を立たり。(中略)永禄八年に、三好左京大夫義次、松永弾正忠久秀と心を合せ、日向守、下野守、松永右衛門佐久道(久秀が/子なり)をもつて、將軍義輝公をころさしむ。此故に三好松永いよく、權威ありしを、四年の後に信長公おこり出て、軍功たかく武威大なるに

あたつて、三好が権威衰へて、義次こ、にはろびぬ。

松永久秀ははじめ三好長慶に仕えて家老となり、長慶の子義興を毒殺、さらに將軍足利義輝殺害に関与し、權勢を振るつた。また、織田信長に降参する際には刀劍や茶器の名物を献上し、助命されている。

十月朔日、芥川の城主細川六郎、三好日向守、城を開退。同日、古清水の城も開退しかば、義昭公を此城にいれまいらせ、信長は芥川の城に入給ふ。猶軍勢をす、めて、池田筑後守かこもりし池田の城にをしよせ二上の丸まで詰かけたりければ、筑後守旗をまきて降参す。人質人をおしければ、信長芥川の城に引返し給ふ。軍功ある者に恩賞おこなひ、名譽あるものに感状をそへらる。五畿内すでおさまりけるを、諸勢にわかちあたへらる。松永彈正少弼久秀以下、來りて降参申す。久秀は吉光の脇差をさ、げ、松島の茶壺を獻ず。(中略)天正元年正月に、松永父子、佐久間右衛門信盛について降参し、多門の城を開渡し、岐阜に参る。不動国行の刀・薬研藤四郎の脇指をまいらす。多門の城は山岡對馬守を居てまもらせける。

このように主君への裏切りを重ねた松永久秀は織田の軍勢に攻められ、茶器「平蜘蛛」の献上を条件とした降参を拒絶し、信貴城での焼死という最期を迎えた。

十月に、松永が一党森、海老名、河内片岡の城にこもる。信忠すなはち永岡兵部大夫、明智日向守、筒井順慶に仰せて

せめらるゝに、海老名自害す。信忠、軍兵を進めて、信貴城をせめらる。(中略)松永久秀、殿主にとちこもる。信忠、使をもつて「降参せばたすけん」といはせらる。松永がいはいはく、「たとひ白骨となるとも、二たび信長にはしたがふべからず」といひ返し、信長、日頃にいづはひとらんとせられし松永秘藏の釜あり。平蜘蛛と名づく。此釜を打くたき、殿主に火をかけたて、みづから焼死す。

『總見記』(貞享二年(一六八五)奥書、元禄十五年(一七〇二)刊)卷第十七「松永久秀父子御退治事」は、その最期について次のように言及している。

又或人ノ申ケルハ。松永始終ノ行跡ハサナカラ狂人ノ如クニシテ。更ニ本心トモ覚ヘス。凡人皇ノ初メヨリ此方。種々ノ大罪人多ケレトモ。カ、ル不覚悟ノ曲者武士ニ於テハ其例ナシ今マテ命ヲ保事。松永日比名器宝刀ヲアツメ。多ク所持セシ故ナラント私語ク人モアリシトナリ。

松永久秀の行状が「狂人ノ如ク」「大罪人」「不覚悟ノ曲者」と激しい非難でもって評価されている。また、度重なる降参と助命に關しては、蒐集していた「名器宝刀」に依る処が大きかったという風聞が載せられている。松永久秀が名物を多く所持している蒐集家として当時の人々に認識されていたことは、卷一の二が松永家における名物と土官をめぐる事件を描いていることとの関連が注目される。

松永久秀の悪評は、仮名草子においても描かれている。

『古老物語』(万治四年(一六六一)刊)

卷第六「三好修理大夫并松永弾正事」

さても松永弾正は、和州にありて城をかまへ、国中をなひかし、欲心あくまで、ふかく、民百姓をむさぼりけるほどに、わが家中に出て入る酒樽を、せいたかく、つくらせ、柳樽と名づけ、それをくづしてハ、塀の覆の椽葺の板の料とす、また、串柿の串も、長さ間半にけづらせ、さだめて、これは壁下地にせんため、となり(中略)

折にふれ、ことによそへて、徳分になる算用をたくみ、兵糧玉くすりは、いふにをよばず、天地のあひだに、あらゆるもの、ひとつも闕ず、たくはへ、もちたり。あまりの奢にや、札をたて、(中略)

松永、邪欲をかまへ、悪行つもり、人望にそむき、天道の罰をうけて、浅ましき、はてにける。国中の諸人は、糞笠をうりて、酒をかひ、松永滅却の祝をせしとかや。

『伽婢子』(寛文六年(一六六五)三月刊)

卷一の二「黄金百両」

源内が主君(※仲注、松永久秀)、まづ大なるふ義を、おこなひ、權威、よこしまに振ふて、民を虐、世をむさぼる、冥衆これをうとミ。神霊これを悪ミ。福寿の籍を、けづられて。その身、杻械にかゝり。その首に、縲紲の繩をかけて、肉を腐。骨を散されん事、何ぞ遠からん。源内、又これにしたが

ひ、悪逆無道なる事。たとふるに、こと葉なし。(中略)その、ち、永禄庚午の年、松永叛逆の事ありて。織田家のために、家門滅却せらる。由利源内、此時に、いけどられて、ころされ。日比、非道に、むさぼり、たくハへし財宝、みな敵軍の得もの、と、なれり。

松永久秀は欲深い性格であり、三好家や将軍義輝、信長を裏切るのみならず領民まで苦しめ、その最期は「天罰」や「冥衆」「神霊」による報いであるともで見なされている。このように、近世前期においても悪評をもつて知られる松永久秀であるが、次の『將軍記』「織田信長記」第十二では、久秀が自分の行いをどのように捉えていたのかについて触れている。

松永弾正少弼久秀、もとは京の西の岡の住人なり。その身貧賤にして諸国を經めぐり、三好家に奉公して才智あり。威勢日をかかぬてつよくなり、公方義輝公をころし奉りてより、いよ／＼洛中畿内に臂をはり、をのれが城に殿主をあげ、長屋をつくり、三好家のをとるふるにいたつて、信長公に属し奉る。ある日、大権現、信長公に対面ありて御物語の時、一人の老人、御前にまかり出たり。信長公、大権現にかたりてのたまはく、「此老人は松永弾正といふものなり。公方をころし、わが主君三好をそむき、又南都の大仏殿を焼たり。(永禄年中に、松永南都の多門の城にこもりし時に、三好日向守、下野守、岩成主税助大將として、南都の大仏殿に陣とりしを、松永夜うちして、大仏殿に火をかけ焼くづしける。これ十月



十日の夜の事なり。此三の大罪は、古しへよりこの方、人たる身には成がたき事なるを、松永一人してこれを兼たり」と仰せありしかば、松永恥かしく、赤面して汗をながし、心に憤て、頭の上、煙のたつごとく也。これよりつゝに謀反をばくはだてけると也。

ここで注目したのは、松永久秀の出自が「貧賤」であることとされていることである。また、引用部分は織田信長が徳川家康に対して、同座した松永久秀の所業について語る場面である。信長の発言を聞いた久秀は深い「恥」と「憤」を感じ、謀反を企てたとされる。久秀は数々の非道を行いながらも厚顔無恥ではなく、自分の行いを深く恥じる人物として描かれているのである。

## 二 巻一の二における松永久秀の人物設定

では、『新可笑記』巻一の二における松永久秀はどのように描かれているのだろうか。まず、久秀は「松永霜台、和州信貴の城主なりしが筋めたしく諸浪人をめしか、へられしに」と冒頭から登場しており、筋目の正しい浪人を登用しようとしている。しかし、二人の侍の太刀と詠草の真偽について家老から話を聞いた後の松永久秀は、次の判断を下した。

其後、御前より仰せ出されしは、「当家を望む浪人、親類書に及ばず。其器量によつて、小知堪忍せば、兩人共にめしか、へよ」との上意。

これは《浪人の登用に際し出自を問わない》という、当初の方

針とは正反対のものである。その矛盾する発言に関して、家老は「大殿御憐愍にて兩人めしか、へられし」と、久秀が二人の侍を憐れんだためという理由を述べている。さらに、二人の侍が自害した後に遺書を読んだ久秀は、「国主をはじめ諸家中、此筆跡を感じ、其二人をおしみ給ひぬ」と、その筆跡に感動し、二人の死を惜しんだ。

以上の通り、巻一の二における松永久秀の浪人達への言動は、「悪逆無道」など同時代の作品で酷評されるような要素は見られず、むしろあたたかな人情味すら感じさせるものであった。当時の読者にとつては、松永久秀は極悪非道な人物であるというのが一般的な認識であつただろう。では、何故巻一の二ではこのように不自然な久秀像が描かれることになつたのだろうか。

二人の侍が差し違える際の述懐には、「正成つたはり道具、親より相わたす」とある。これは後に道具が「わたくしの親修復のために奈良に遣はしける」時に盗まれたものと主張した「地侍の何かし」の発言より、平林香織氏が「申し出た地侍の父親が盗まれた」ということは、刀と詠草とセットを買ひ求めた二組の人物とは、件の浪人の父かせいぜい遡つても祖父あたりだろう」と指摘している。

「地侍の何かし」の登場以前、家老は既に道具の盗難とそれらが売り渡されたことを見通しており、二人の侍に対しては「まことに武士の意気・道理、いさぎよし」と称賛する一方で、「先祖に對しては「心にくき所あり」と含みを持たせながら批判する。こ

ここでは、家老の言葉によって二人の侍と先祖が対比されることにより、二人の侍の「武士の意気・道理潔」さがより強調されている。

道具を購入し、出自を偽った「先祖」の行動は子孫の将来を開くための配慮であり、情状酌量の余地があるようにも思われる。だが、『古老物語』にも「子孫のためとて、不義をいたさば、やがてこれ、わざはいを植て、子孫にのこす、と、いふものなり不義にして、さかえ、不忠をもつて、世にたてるものハ、浮雲のごとし」と武士の心構えが説かれるように、決して許されない行為である上に子孫へ禍を与えるとき時は見なされていた。

二人の侍の「筋め」は結局楠木正成の子孫ではなかった。その「先祖」も金銭で系譜を偽り、それが子孫である浪人達に報いてしまった。しかし、皮肉にも二人の侍の精神はそのような不屈きな先祖の「筋め」によらない、武士として優れたものであったがためにこの悲劇を生んだともいえる。そして、それは周囲の人々だけでなく、松永久秀の心をも動かす程の高潔さを持っていた。

巻一の一において、当時の一般的な評価からあえて外れた善人のような久秀を作者が描いたのは、「二人の侍はあの松永久秀でさえ心を動かし、さらに惜しませる程の人物であった」と読者に示すためという理由がまず挙げられる。それは彼らの素晴らしさを強調し、読者に伝えるには効果的な手法であると言えるだろう。だが、久秀と二人の侍との関係に着目すると、別の側面が見えてくる。次の本文は、二人の侍の遺書が読まれる場面からの引用

である。

書置、刀の鏝下に見せて、二人さしちがへてをはりぬ。此筆跡御前にして開きぬ。「我々素出卑賤一而家業亦疎也。然、而先祖武威不常。故、媒二筆・刀一而雖一蒙二於過分之禄一筆・刀亦不三分明。嗚呼語則、先祖汚屍の不言則、賈士之罪難通。將就三死地二、速三恥辱二、而已。」国主をはじめ諸家中、此筆跡を感じ、其二人をおしみ給ひぬ。

二人の侍はともに「卑賤」かつ「家業」が疎く貧しい境遇の出身であり、だからこそ楠木正成が先祖であることを誇りにしていたのだ。ここで注目すべきは、近世前期の資料においては、久秀自身も元は「貧賤」の身だったと見なされていたことである。由緒正しい「筋め」を持つていない松永久秀が、浪人の登用には「筋め」の正しさを条件として求めたのが巻一の二の発端であり、その結果、同じ「二色の道具」を持参して「筋め」を主張する二人の侍が士官にやってくる、という思いがけない事態が発生したのだ。

松永久秀は諸道具の蒐集家としても知られており、本文のように全く同じ道具が二組あるという状況が何を意味するか、家老と同じく理解することは可能であっただろう。また、『將軍記』においては、久秀は悪逆無道ではあるが決して《恥知らず》な人物ではなく、むしろ己の行いを非常に「恥かしく」思い、その悪事を客観的に捉える人物として設定されていることも興味深い。巻一



の二において久秀が当初の登用方針を翻したのは、二人の侍の事情を察し、己の出自を差し置いて「筋め」を重視した自らの過ちを認めたためではないだろうか。

さらに、「貧賤」の出身であった松永久秀と、「卑賤」かつ「家業亦疎」という浪人達は、その背景を同じくしていた。ただし、二人の侍は「親より相わたす」太刀と詠草があつたがゆえに、「先祖（補正成）武威不<sub>レ</sub>常」と、親から教えられた偽りの誇りと希望を持つてしまつていた。一方、久秀は何も持たなかつたがゆえに、「諸国を經<sub>へ</sub>めぐり、三好家<sup>みよとけ</sup>に奉公して才智あり（将軍記）」という記述やその後の権謀術数に満ちた生涯の通り、己の才能や努力によつて城主まで上り詰めたという点で対照的であつた。

松永久秀が遺書に感慨を受け、二人の侍を惜しんだのは、もちろん《主君への裏切りを重ねる自分には無い武士としての高潔さ》を目の当たりにした感動と自省という理由もあるだろう。しかし、彼らの「卑賤」という境遇が自分と似ていると知つた久秀は、さらに「一つ掛け違えば、自分も二人の侍と同じ運命を辿つていたのかもしれない」という彼らへの共感と同情、そして救つてやれなかつたはがゆさを抱いたのかもしれない。

極悪非道な人物として評価されてきた久秀の「御憐愍」をはじめとす一見不自然な言動が描かれたのは、単に作者が通説を顧みなかつたためではない。卷一の二には、彼の出自を踏まえた上で、一面的な「悪」の枠に留まらない新たな松永久秀像が描写されているのである。

### 三 松永家という舞台設定

しかし、二人の侍による自害の高潔さとそれを賛美する周囲の人々を描く卷一の二を、単純な美談と見なすことはできない。平林香織氏は「国主にありたきは良き家老ぞかし」という賞賛の結語は、その良き家老が実際は殿の判断の間違ひを指摘し、かつ二人の無駄死にを防げなかつた、という藩政の純びを逆照射する」とし、松永久秀の「史実」との関連から「国主の英断や家老の卓見として記述されるべきこと一つ一つが陰翳を帯びたものに思えてくる」と述べる<sup>20</sup>。松永久秀の家中という舞台設定がその後の滅亡を予感させるものであるのに加え、家老や家中の者達の言動には不穏な側面が見え隠れしている。

久秀が二人の侍の登用を決めた後、家老は大横目の三人に対して、二人の侍が死ぬおそれがあるので太刀と詠草の件について噂をさせないよう命令したが、彼らは噂を食い止めることはできず、浪人達の耳に入つてしまふ事態となつた。大横目達に対し、家老は「義理を立てるために二人の侍が死ぬと理由を説明したが、大横目達は「合点」がでなかつた。つまり、彼らは「義理」が二人を死に追いやることは想定できなかつたのである。

松永家の家臣については、「伽婢子」卷一の二「黄金百両」<sup>21</sup>にも興味深い例がみられる。「源内」という人物は、「まづ大なるふ義を、おこなひ、權威、よこしまに振ふる、民を虐<sub>へ</sub>、世をむさぼる」久秀に仕えるようになってから、「又これにしたがひ、悪逆無道<sub>あぐさやくふだう</sub>

なる事。たとふるに、こと葉なし」と主君に感化されて非道な人物となり、親しかった友人まで虐げるようになってしまった。一方、『新可笑記』巻一の二における家中の人々については、『伽婢子』のように明確な悪行が描写されているわけではない。だが、武士として当然重視すべき「義理」について考えが及ばない大横目をはじめ、二人の侍にとって不名誉な噂を広げてしまう家中の人々は、家老のように「よき」人物では決してなかった。これは、久秀による松永家の人材登用や家中の運営が失敗していることを示している。

さらに、道具の真贋が明らかとなった際、家老は二人の侍を取り次いだ者に責任は無いと久秀に進言したものの、彼らの登用の是非については何も触れず、後で密かに大横目達に命令するに留まった。これは、久秀の意向が二人の侍の登用にあることを察した家老が、久秀に諫言を行うことは出来ないと判断したためであろう。そのような主君に己の真意を伝えることも、部下に命令の意図を理解されることも出来ず、悲劇が終わった後になって詳細を語る家老の言動には、「よき」人物であるがゆえに松永家の中で孤立するというもう一つの《悲劇》と見なすことができるだろう。また、その人物が「家老」という役職と設定されていることは、近世前期において松永久秀が三好家の家老として大きな力を持ち、主君殺しなどの非道な行いをしたと言及されることと無関係ではないと思われる。巻一の二では、松永久秀という人物が《権勢を振るう悪家老》のイメージを読者に想起させる一方で、それとは

対比的な「義理」への理解と事態の見通しに優れるも《上手く采配を振るうことが出来ない「よき」家老》を登場させている。巻一の二の「家老」という人物設定は、松永久秀と比較することでその素晴らしさが強調されると同時に、家中における彼の孤立する立場も際立つことになるという複合的な効果を持っている。

#### おわりに

以上、本稿では『新可笑記』において珍しく明確な人名が設定される松永久秀に着目し、巻一の二の読解を行った。巻一の二は、逆臣として非難される松永久秀と、希代の忠臣とされ当時の評価の上では全く正反対の存在である楠木正成とを関連づけて物語を構成している。ただし、既存の久秀像を踏まえつつも新しい人物造形を行うことにより、効果的に二人の侍の武士としての潔さを示していることは注目すべき点であろう。

また、巻一の二の物語は、悲劇的な結末を迎えた二人の侍による「武士の意気・道理」を称賛すると同時に、松永久秀の事跡を知る読者にとっては単なる美談に留まらず、家中で孤立する家老の悲劇と松永家の破滅を感じさせる重層的な構成となっている。

このように巻一の二は、読者に松永久秀のイメージを想起させてそれを裏切り、意外性を感じさせて物語に引き込むという、作者の作劇における工夫が見られる章段である。

- (1) 『太平記』卷第三「主上御夢事付楠木」  
 「河内國金剛山ノ西ニゴソ、楠多門兵衛正成トテ、弓矢取テ名ヲ得タル者ハ候ナレ。是ハ敏達天王ノ四代ノ孫、井手左大臣橘諸兄ノ公ノ後胤タリト云ヘドモ、民間ニ下テ年久シ。其母若カリシ時、志貴ノ毘沙門ノ二百日詣テ、夢想ヲ感ジテ設タル子ニテ候トテ、稚名ヲ多門トハ申候也。」トゾ答ヘ申ケル。」  
 (後藤丹治・釜田喜三郎校注『太平記』二 日本古典文学大系34、岩波書店、一九六〇年より引用)
- (2) 堀章男『西鶴文学の地名に関する研究第五卷』、和泉書院、二〇〇二年
- (3) 平林香織『新可笑記』巻一の二「一つの巻物両家にあり」論  
 『長野短期大学紀要』第64号、二〇〇九年十二月
- (4) 羽生紀子『新可笑記』巻一の二「一つの巻物両家にあり」の読み—南北朝正闘争いと「二つの笑い」の内実—『武庫川女子大学紀要 人文・社会科学編』六十六、二〇一九年三月
- ①の浪人二人が太刀と詠草を差し上げ、真偽の判定が問題となるところは、『太平記』巻第二十五「宝剣進奏両卿意見の事」三種の神器来由の事」を下敷きしている。家老の侍二人の死の予言は、楠木氏が朝敵とされた逸話である。(中略)②の素材は、『太平記』巻第十六「楠正成兄弟以下湊川にて自害の事」、巻第二十五「秦の繆公敵の囲みを出づる事」である。(中略)③の素材は、『太平記』巻第二十五「黄梁午炊の夢の事」、後南朝の楠木正秀らによる禁闕の変、楠木正虎による楠木氏の朝敵赦免の勅許の逸話である。」
- (4) を参照。
- (6) 富士昭雄・広嶋進校注訳『井原西鶴集』④ 新編日本古典文学全集 69、小学館、二〇〇〇年
- (7) 拙稿『新可笑記』の描く「油断」—巻五の二「見れば正銘にあ

らず」考—『近世文藝』第九十九号、日本近世文学会、二〇一四年一月

- (6) を参照。
- (9) 国文学研究資料館 青山歴史村蔵本(請求記号、339-109-30)より翻刻。句読点・括弧は仲が付した。
- (9) を参照。
- (11) 「織田信長記」第十二(9)を参照。
- (12) 大阪府立中之島図書館石崎文庫蔵本(請求記号、石崎344/1)より翻刻。
- (13) 朝倉治彦編『假名草子集成第三十巻』東京堂出版、二〇〇一年
- (14) 朝倉治彦編『假名草子集成第七巻』東京堂出版、一九八六年
- (15) (9) を参照。
- (16) 『總見記』巻第十七(12)を参照)にも「抑久秀ハ元来京都西岡ノ住人ナリ。貧賤ニテ諸州ヲヘメグリ」と、『將軍記』とほぼ同じ記載がある。
- (17) (3) を参照。
- (18) 巻第五「敵となり味方となり、こゝろざしだまらぬ武士の事付楠三代忠義の事」より引用。(13) を参照。
- (19) (9) を参照。
- (20) (3) を参照。
- (21) (14) を参照。
- (22) 松永久秀を三好家の家老とする資料には、前述の『將軍記』『古老物語』『伽婢子』などが挙げられる。
- ※『新可笑記』巻一の二本文の引用は、新編西鶴全集編集委員会編『新編西鶴全集第三巻 本文篇』(勉誠出版、二〇〇三年二月)より行った。踊り字は影印に従って直し、台詞には「」を付した。

〔付記〕

本稿は京都近世小説研究会（令和二年七月）における口頭発表に基づくものです。席上でご教示を賜った廣瀬千紗子先生をはじめとする先生方に御礼申し上げます。

（なか・さおり 本学非常勤講師）